## 60　東京法学院討論演説会

〔『法学新報』第四六号　明治二十八年一月二十八日〕

○東京法学院討論演説会

本月十七日午后一時より同院大講義室に於て開会せり講師院友及生徒の来り会するもの無慮一千余名也

当日の討論題は左の如し

約束手形

一金千円也

右金額来二月十五日貴殿又は貴殿の指図人へ無相違仕払可申候也

但丙銀行拙者当坐勘定ヨリ仕払可申事

住所

明治廿八年一月十日　　甲　某

乙　某　殿

右ノ手形ハ有効ナリヤ否

奥田義人氏満場の推薦に従ひ議長席に就けり、第一席は積極の主論者卜部喜太郎氏なり氏は本問手形は法律上事実上毫も瑕瑾なき理由を切論して壇を下れり、第二席として北岡保定氏壇に現はる氏は消極の主論たり其得意とせる多弁を試むるは此時にありとの容体にて本問手形の無効なる理由を詳論せりそれより生徒院友争ふて壇に進み有効無効の論戦を試み勝敗の数得て卜す可らさりしか第七席に至り花井卓藏氏は突如として消極論者の援兵に打出てたりし氏は熱心に消極論を主張し手形の性質商慣習ありとあらゆる消極論の頼となるへき武器をならへて論弁せり満場為に消極論に化し去られんかの形勢を示せり高根法学士は機会そ来れる平生の器量此時に於て用ふへしとも評すへき顔付にて壇に進めり氏は論し去り論し来り縷々数千言を費して積極論を主持せり次に石山彌平氏クソ落付きに落付きて簡明に高根学士の数千言を駁し終りしは御手際也石山氏の演説了るや同輩を排し進んて弁論を試みんとするもの続々壇に近きたりしか奥田議長は満場の動揺を制し宣言して曰く討議は尽きたりと認む討論は終結として直に採決せん積極論に賛成者は起立多数也積極論に決す（但し積極論者の唱ふるところ本問は法律問題にあらすして事実問題也と云ふにあり）是にて討論を終れり次に花井卓藏氏軍国の間諜殺す可らすと云ふ演題の弁論を始めたり氏は自から公法家を以て許す故に論佳境に入るや論議縦横眼中世界に公法家あるを認めさるか如し氏の其言はんと欲するところを尽して癪か下つたと云ふ風体にて壇を退くや柵瀬軍之佐

氏は壇に立てり氏は戦時の朝鮮と題して講談を始めたり氏は新聞記者として牙山成歓及平壌等の合戦に従軍し弾丸硝雨の間を跋渉したる猛者也清軍と開戦の端緒より説き起して平壌略取に至るまて戦場の実歴を説明する最も巨細也、其話頭妙処に入るや満場は覚へす絶叫せり其演説二時間余の長きに至れり氏は満堂拍手崩るゝが如き中に壇を去れり時に午下八点を報するを以て他の弁士は次回に演説すること、定めて解散せり